

# *SKYLINE*

創刊号



Vol.1No.1 横浜国大ワッダーホーゲル部

# SKYLINE

Vol. No. 1



創刊号

SKYLINE

創刊号

## 目次

巻頭言

吉田

4

創設後の一年をふり返って

堀内

6

かもしか

田上

9

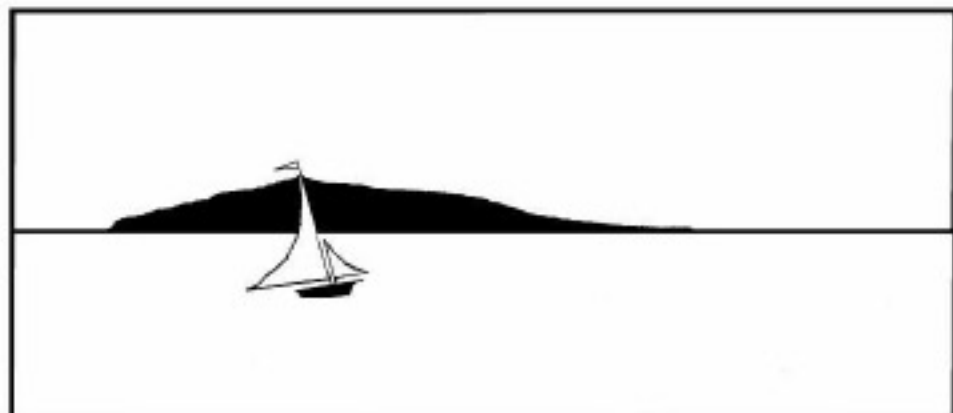
乾徳山黒金山登山紀行

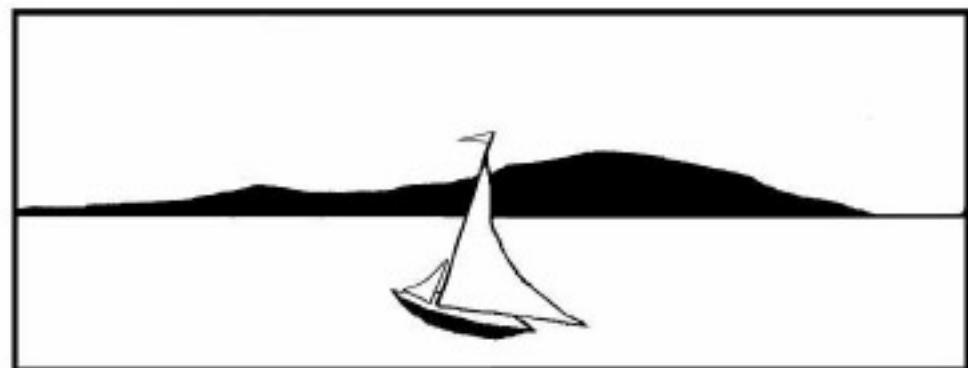
嘉納  
望月

11

松本

田上  
石黒





あら！ まだ早いわ	佐藤	17
大菩薩峠ハイキング	小野	19
ワングル雑感	河野	23
丹沢登山記	小野	25
丹沢主脈縦走記	嘉納	28
33年度役員名簿		34
原稿募集		35
編集後記		36
表紙	(H. K)	
カット	(N. S)	

# 巻頭言

「あゝ、やっとたどりつけた」

吉田

私達のワングルが、この1年の間に、小規模ながらも、サークルとして、恥ずかしくないものに成長し、しかも、機関誌まで発行できるようになったとき、私は山の頂上にでもたどりついたような気持で一杯になった。

この小雑誌は私達の悩みをうちあける所であり、それを解決しようとする所であり、友情をはぐくむ所であり、自然をたたえる所なのです。私達が、めいめい心の扉をあけて、お互いに訪問し合う所とも云えましょう。更に進んでは、新しいモラル建設の場になりたいと思います。

この創刊号は殆ど、去年の紀行文でうまり、右に述べたような目的にあまりかかいませんが、号を追うに従って、所期の目的を達成させようと思います。私はいま、この小雑誌は、また、自然をたたえる所であると云いましたが「俺は自然な

「昨年度

ワングル

の活動」

四月 ワンダー

フオーゲル創設

六月 大磯ハイキング

七月 箱根ハイキング

八月 北軽井沢キャンプ

九月 丹沢登山

十月 丹沢集中登山

十一月 大菩薩峠

ハイキング

四月 伊豆一週旅行

んで認めやしない。」と豪語される人も、大勢の中にはあると思います。しかしその人は間違っていると思います。彼は「自然を知らない。」という簡単な理由で「自然を認めない。」にすぎないからです。野を歩き、山に登ってみれば、自然も生命をもつて変動していることに、すぐ、私達は気がつく。私達が愛情をもつて、自然に接すれば、自然も愛情をもつて私達に見（マミ）えてくれる。どうして「自然を認めない」なんていえようか。私は山や野へ行くと必ず写生をする。鉛筆も紙もいらぬスケッチだ。むしろ私がほんとうに紙にかいたりすれば、彼女（自然）は、私の絵を見て、怒り出すか、泣きだすに決っている。だから心の中にスケッチをするのだ。自然の美しさを、一瞬間とらえればそれでいゝのだ。それは巨匠の描いた絵にも匹敵するもの、いやそれ以上のものとして私達の心の中に永遠に残るに違いない。この小雑誌は、私達にとって宝ともいえましよう。いつまでも大事に、大事に育てあげてゆきたいと思えます。他校のワングルの方や、本学の人達が沢山、助云や忠告をして下されば大変嬉しいことです。

「今年度

ワングル

の活動予定」

五月 新入生歓迎

ワングリング

機関誌第一号

六月 立野役員選出

七月 北アルプス

八月 機関誌第二号

九月 機関誌第三号

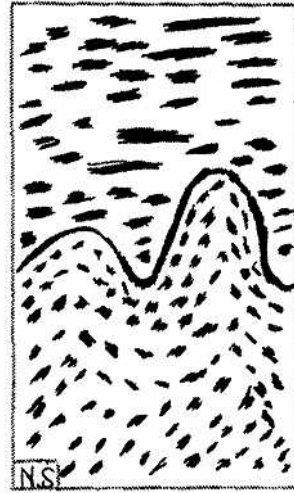
十月 大学祭参加

一月 秩父ワングリング

二月 機関誌第四号

三月 合宿キャンプ

# 幹徳山黒金山紀行



非公式であったが、我々五名の部員は十一月一、二の両日が大変愉快な気持ちで過こした。この秋の最もよい季節に美しい山行を味わい得た我々はその味わいを、皆にお分かち致したく全コースを五つに分け、クヂで選んで紀行文を分担して書いた。

(参加人員) 五名 リーダー 田上

嘉納・望月・松本・石黒・田上

## (登山記録)

木村編	15.00	終	23.55	
登山口	15.15	着	3.06	
一酒完了		終	3.45	
		武田信玄廟	4.25	徒歩
		一の橋停留所	5.57	徒歩
		幹徳山登山口	6.10	
		徳和着	6.20	朝食
		終	7.30	朝食
		銀昌水	8.20	
		錦昌水	8.50	
		大平牧場終	9.30	
		幹徳山着	10.40	昼食(半)
		終	11.10	昼食(半)
		安盛山	11.45	
		終	11.55	
		黒金山	12.25	昼食(残り)
		終	13.10	昼食(残り)
		大才	13.30	昼寝
		終	14.00	昼寝

(1) 出発から徳和まで——嘉納——

十一月一日二十時四十分、横浜駅で学割切符を買っていると肩をたたく人あり、部員の牧野氏なり。一緒に新宿までゆく、誰一人部員は来ていない。長野行き行列は隣のホームにまで達する程、牧野氏がつき合ってくれるので有難い。二十時十分五名全部そろろう。

二十三時十分汽車来る。大いに走って一番前に席をしむ。全部一緒にすわれる。牧野氏帰る。彼に感謝す。汽車出発、私以外すべて寝たふりをする。(私は本を読むふりをする)座席は寝づらい。彼等床に新聞を敷きて寝る。途中 担ぎ屋風の男女乗り込む。その中の男が彼等の寝方を見ていたが寝方がわるいから場をとりすぎると 怒鳴りはじめる 「寝方もわからないんなら、俺がいいように並べてやろうか！」と車内中がふりむくほどの喧嘩腰、私は何も云わずに本を見つづけた。人に抗議するのに喧嘩みたいにしなければならぬ男に私は気の毒に思っ

た。けれど彼等も寝場所をとりすぎていた。皆おとなしく男の云う通りにしたら通路が大きくあいた。しばらくして皆が寝込むと、男は私に「旅なれてないんですね」と云った。恐らくそう云わねば、彼のさっきの興奮の弁明にならなかつたに違いない。しかし私は相手にならず黙つてうなづいた。そのうち望月氏が目を覚ます。恋のはなし 彼は相手に自分を理解してもらいたいと云い、私は自分が理解されるなんて真平だと云った。彼は相手を求めるハンターなら私は釣糸をたれて待つている漁夫だ。「恋に關してだけは女の性質だ。さもなければお前は男として未成熟だ」彼は云った。彼と私とは正反対だ。

三時十分塩山につく。バスは七時まで出ない。しばらくバスの待合にいたが——全部で五十人位の登山客、女も多い。可憐型の美女あり、帰りのバスでも一緒になったと記憶する——つひに決して歩きはじめる。懐中電灯頼り、星が美



しい。冬の星座が見えるのだ。オリオン・シリウスの青白い光、空気がすずしくよい気持だ。恵林寺には四時三十五分、空が白むころから望月氏の一人舞台、四人さんざんに聞かされる。架空でもよいから恋人でも持つていないとこんな時無防備、二倍の汗をかく次第となる。以来彼は至るところで私達に聞せて下さる。

あけて来るとあんなに星があつたのに薄雲が多い。道に添ふ流れは大きななめこかな。岩に囲まれた壯観、人家の造りも独特の村で面白い。六時十分乾徳山登り口、ここから徳和まで超特急（朝食を食べたい一心）徳和に休憩所あり。汗びっしより、休みでしたらすごく寒い。ふるえる、しかも十円のお茶代を敬遠して、ブルブルで冷飯、冷水、「お茶いりませぬか」をことわって、しかも水をもらいにゆくけちな奴等は紙くづをもやして暖をとる。

(2) 徳和から牧場を経て——望月——

いよいよ本当の登りとなる。乾徳山まで二時間半。爽やかな朝の空気に全員張り切つて、一步一步と小路を刻みつける。夜間歩行では空腹のためシンガリをつとめた松本氏は朝食をすませてからは快調。「腹が減つては戦は出来ぬ」黙々と進む予定時間の半分程で銀昌水に到る。リーダーの田上氏の指示で水筒に水をつめる。登りは割合と急である。只下を見て足を踏みしめる。夜間歩行のためか疲れる。時折可愛いあの子の顔が頭に浮ぶ。(ガンバツテ!) (頭に来ちゃうな?) この辺りから乾徳山の岩場が雑木の間から見える。やがて視界が開けて銀昌水に着く。小休止、冷い水に各人喉を潤し息を入れる。

周囲の景観は問題なく美しい。右の方に一面の枯れたすすきの原で茶色のすすきが印象的、後方には富士がかすんで見える。左上方には銀灰色の岩場が緑の木々の上にそびえて青い空に照り映えている。(あの子に見せたい!) 緩やかな登

いや幸福な御仁だ。

(3) 乾徳山

——松本——

りを楽にすすむ。高原の様な感じが深まる。柵が見えて牧場に出る。小屋があつて中から五人の色男に声がかかる。それでは一休みするとしよう。牛乳が喉にしてみてもうまい。一人三十円づつとられてふところ軽くなつた為か元気が良い。枯れた牧草と牛の踏跡をふみこえて登る。もうすすきの原は下の方である。山肌の緑が紅葉した黄色の木に縁どられて何んとも云えない。楽に登って尾根に出る。周りの景色に見とれて歩く。冷涼な風が髪をそよがせずしい。アツ、帽子を忘れた。水場におきざり、取りにゆくのも面倒だ。負け惜みを云つてあきらめる。サアもう一息だ。

「附訳」心がけがよいので帽子はとどけてもらつた。モウケ!!!

「松本註」年中いつも、とくにこの山行では、いつも残り四人は当てられどほし。何と云つても彼氏でないといけないという人がいるのかな。途上 高校時代からの得恋、失恋の物語を聞かされる。

開拓農協牧場より見た乾徳山（標高2020 m）の全貌はふと息を吞ませるものがある。巨大な岩が隆々とそこここに重なり合い、巨岩の銀灰色、白樺の白褐色、保安林の黄、紅葉の紅、常緑樹の緑と秋猛の色合い、コントラストは人を感動させずにはおかない。我々五人は秋山の美に浸りながら高原より乾徳へと登つていった。やがて岩場にかかり、ごつごつした巨岩連をはいつくばつてよじ登る。途上石黒丹那、皆の後をついて来たのはよかつたが、とんでもない岩場の方に回り道をして、足を踏みはずしそうになつたり、まさに九死に一生を得た様な顔付で追いついて来たのは、まことに同氏のため、いや同氏の彼女のために喜びにたえない。くさがりが二、三カ所あつて岩登りを続ける。

或る鎖のところで、アベック連れの可

憐なる女性が思い切りがつかず、鎖の下で座り込む。非常やこの男だけ登って行つたと見るやさすがに五分もせずにもどつて来たのはその心がけや殊勝なり。ワングルの男性諸君はもつとしっかりと女性を強調したい。

頂上より見た連峰は又格別にすばらしい。いつみても雲にそびえ、壮麗な三國一の富士、遠くに大菩薩峠峰、南ア：手前に大烏山など、しかも乾徳山同様今こそとばかり錦織の様なleaf patternをおされて下にとび込みたくなる、まことに乾徳の秋は言語に絶する。

(4) 乾徳山から黒金山 — 田上 —

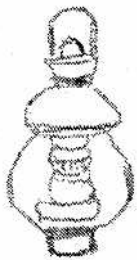
乾徳山の岩場を過ぎると、奥秩父特有の幽玄極らない原生林中に突入する。展望は全く得られず、鋸目、時に落ちている飴の紙などに従いながら倒木を踏み越へ踏み越へ進む。全く気が滅入りそうだが、さすがワングルの猛者連も大自然の静寂に

圧迫されて黙々と歩くのみ。しかし道にふんわりと浮いた苔を越え大自然の息苦しい程の圧迫を感じながら進むコースは如何にも奥秩父ならではの。やがてぼつかりと開いた明るいピークに出る。これが笠盛山である。ここで一息入れて又原生林に入る。これから先は道もはつきりし、倒木も少なくなり楽しいワングリングである(望月君は誰かと歩きたかつたろう)やがて黒金山の肩につき、そこから五分で黒金山の頂上(2332m)につく。頂上では霧がかかり景色は半分しか見えなかつたが、国師岳、甲武信岳の景色はまことにすばらしい。ここで昼食をとる。寒かつたので、火を焚く。誰かさん、焚き火した手でミカンを真っ黒にして、それでおいしそうに食べる(女の人には見せられない!)なほ頂上では非常に寒かつたので、いろいろの物を食べてすぐ降りる。

(5) 黒金山より大ダオを経て — 石黒 —

黒金より下り一方となり途中はじめて熊笹あり、丹沢が思い出される。少時間の後、大ダオに着く。乾徳山への行程にて、あたりを見わたせば、折からの太陽の光に照らされた大ダオが見え、帰りの良き昼食場所と定めておいたのだが、午後から曇り寒さを増し期待がはずれる。それでもそこにて横になれば汽車にて寝られなかつた疲れが出たのかうとうとした気持になる。大ダオの少し手前から一緒になつた若い人からカラーフィルム一本をもらう。この気前のよさは十円のお茶をも飲まずに震える我々には到底足元にも及ぶところではない。少し行くと丸太踏みの木馬道となり非常に苦しむ。張り切りボーイの望月君がトップで走り出したので、次第にスピードが早くなり、つひには時速30 km程にもなる。バスの停留所につく頃雨がふり出す。例の茶屋で雨やどり、魅力ある女性がいて時々目を交す。バスに乗る(嘉納註)バスの中で山よサヨナラご機嫌よろしうと望月氏と大

声で歌つた。今日一日山は私達に笑つてくれた。そして別れを惜しんで今また泣いてくれた「隣りのいとも純情そうな女性に魅了される。それにしてもバスガールは親切で都会のバスガールの機械的なのに対して人間味を感じさせられる(気が多いぞ!)景色もよかつたし、計画も思う通りにいった。満足感に話もはずむ。途中「笹子餅」を買つて食べたが最後に二個を三人で分ける破目になり、外側とアンコを分ける珍案も出たが結局ヂャンケン、普段心がけの良いはずの某氏が食いはぐれる。車中談は初め上品な我等には聞くに耐えぬ下品な話から始まりつひに自殺者の心理分析と云う程の高級な心理学に達し熱が入る。新宿で解散する。



# 編集後記

★ まず、四つに分散してしまう部の前途に対して本機  
関誌があらゆる意味に於ける、統一的な絆であるこ  
とを期待する。

★ 発行がずい分と遅れてしまった。編集者が、関西旅  
行などするからだ。しかし二号には、その紀行文を  
寄せて、埋め合わせをつける。

★ 遅れた理由のもう一つは原稿が遅れたことで、丹沢  
集中登山は一部分の原稿しか来ないので、割愛の止  
むなきに至った。カットは編集者の他に、鈴木  
直美さんに御協力願った。

★ 原稿整理は、磯崎さん、加藤さん、山上さんにお手  
伝ひ願った。

★ 最後に、私達のために非常に御尽力戴いた、印刷の  
山口氏にお礼申し上げます。

## SKYLINE 創刊号

昭和33年4月20日印刷

昭和33年4月22日発行

編集責任者  
嘉納秀明

発行所

横浜国大ワンダーフォーゲル編集部